

題目 社会環境の変化に対する順応～低関係流動的都道府県への引越しに着目して～

氏名 山口真央

指導教員 結城雅樹

高関係流動的な環境である北海道大学において、大学進学に伴う移住を経験した大学1年生を対象に、移住前の関係流動性と適応感の関係を検討する研究で、移住前の関係流動性が高いほど自尊心・一般的信頼が高く、対人関係満足度が高いということが発見された(小楠・結城, 2019)。小楠・結城(2019)は、低関係流動的な環境の出身者は高関係流動性社会における適応方略を身につけておらず、その結果適応感が低くなると考察している。しかし、小楠・結城(2019)の研究は、低関係流動性社会への移動は扱っていない。近年では地方移住への関心が高まっている(東京新聞, 2020)が、その一方で、移住者と地元住民との摩擦やいざこざが起きており(社会動向レポート, 伊藤)、低関係流動性社会への順応は重要な課題であると考えられる。そこで本研究では、低関係流動性社会への移動に伴う適応感と適応的方略に着目した。低関係流動的都道府県に、高関係流動的都道府県から引越しをしたグループと低関係流動的都道府県から引越しをしたグループを調査対象として、引越し前居住地の関係流動性が適応感や人々の心理・行動傾向に与える影響を検証した。そのために、10の指標を用いて、各引越しグループの引越し前・後の関係流動性(移住前関係流動性、移住後関係流動性)、適応感(低関係流動性社会における適応度、対人関係満足度、人生満足度)、心理・行動傾向(地域のコミュニティに溶け込もうとする積極性、平均思考謙虚状態、下降思考謙虚状態、自尊心、一般的信頼)を測定し、引越しグループ間で適応感や心理・行動傾向に差がないか検討した。その結果、各引越しグループ間で、適応感や心理・行動傾向に有意な差が見られなかった。この結果から、どこから引越してきても低関係流動的都道府県に同程度に順応できることが示唆された。さらに、低関係流動性社会における適応度と地域のコミュニティに溶け込もうとする積極性、平均思考謙虚状態、下降思考謙虚状態との関連を検討した。その結果、適応度と積極性、平均思考謙虚状態との間には正の相関が、下降思考謙虚状態との間には負の相関が認められた。この結果から、低関係流動性社会において、積極的にコミュニティに溶け込もうとすること、自己を平均的だと評価する謙虚状態を持つことは適応的であるが、自己を悪く評価する謙虚状態を持つことは適応的でないことが示唆された。